

日本書紀の敬語

——「勅」「命」「御」をめぐって——

榎 本 福 寿

一、前稿からのひきつぎ

この小稿は、日本書紀（以下、書紀と略称する。本文は新訂増補国史大系本により、字体は通用のものにしたがう）の記述、あるいは表現がどのように成りたっていたのか、その実態を、おもに敬語をとおして考察しようとする。同じ問題を扱った前稿^①につづく第二稿である。前稿では、「奉」を取りあげたが、便宜、その検討によって得た結論を要約して示すと、次のとおりである。

すなわち、書紀三〇巻は、三つの群に分かれ、それぞれの群ごとに「奉」の使い方を異にする。まずⅠ群（巻一・二）では、「奉」を漢語そのままに使う。そうして、しかも多用する点に特徴がある。Ⅰ群にもまして「奉」を多用するのがⅢ群（巻一四・二一・二四・二七・三〇）である。このⅢ群では、多用は、また積極的な活用の謂でもある。漢語「奉」がもつさまざまな意味の、その多くをそこに見ることもできる。漢語として「奉」を多用することにおいて、Ⅰ群とⅢ群とはあい通う。一方、Ⅱ群（巻三・一三・二二・二三・二八・二九）は、その二つの群のいずれとも著しく異なる。「奉」の使用に消極的であるうえに、おおむね、それを和訓にもとづく漢字表記、

いわゆる正訓字として使う点に特徴がある。

もとより「奉」を検討した限りでの結論ではないが、それぞれの特徴は、なおまた各群の表現の成りたち一般に通じる基調でもあったはずである。小稿は、前稿をうけて、そのことの検証と補完とを目的に、同じ敬語のうち、体語をとりあげて検討する。また一方、この稿のあとに予定している第三稿で、動詞を取りあげ、最終的なまとめを行なうための、そのあしがための意味もあわせもつ。

二、「勅」「命」の使用における各群の違い

さて、体言の敬語のうち、数が多くしかもそのあらわれが各群それぞれに特徴的な用例に、「勅」「命」がある。双方ともに、古訓では、おおむね「みこと」や「おほみこと」ないしは「みことのり」などと訓まれているが、用例を、いまここに、「天皇勅」「天皇命」などが代表する天皇の勅命をあらわすものに限って、おのおの巻ごとに拾い出してみると、各群ごとにあきらかな違いをみせる。次の表は、該当する全ての用例を、その熟語まで含めて、数字にあらわしたものである。なお、「馬子宿禰大臣還于京師、復命屯倉之事。」(二〇106)などの「復(服・報)命」における「命」は、熟語動詞を構成する一部とみて除く一方、神代紀(一・二二)の天神や神功皇后紀(九)の皇后などには、天皇に準じて「勅」「朕」を使うので、そこでの「勅」はもちろん、「命」も取りあげる。^③

群	命	勅	巻
I	0<3 2<5		一一
II	1=1 0=0 3>0 1=1 6>0 0=0 2>0 1>0 2>0 0=0 8>1		三四五六七八九〇一二三三
III	2<5 0=0 1>0 1<14 0<3 3<29 1<4 0=0		四五六七八九〇一二三
II	3>0 3>2		三三
III	0=0 1<3 1<2 0<2		四五六七
II	2>0 1=1		六元
III	0<5		三

表にあらわれた数字の多寡をみる限り、巻一九などが他に比べて著しく突出している事実は、とりわけ関心を惹く。けれども、それは、記述の内容による。巻一九は、任那・百済・新羅など朝鮮半島を舞台にした外交に関する記述が大半を占め、またそれが、日本とのかかわりにおいて展開している。日本とのそのかわりの基点は、もとより天皇である。勅命の頻出は、そうした外交関連記述を主とすることにもなう、その必然的なあらわれとみなければならない。したがって、記述のむしろ内容に大きくかわる用例数の多寡は措くとして、注目すべきは、表中の不等記号の向きが群ごとに違い、しかも各群の内部では、それが一定方向に向いている点である。Ⅱ群では「命」を、これとは対照的に、Ⅰ・Ⅲ群では「勅」を、それぞれ専用ないし優勢に使用する。その傾向に異例となる巻は、Ⅲ群のうちの、わずかに巻一六しかない。もっともこの巻一六の例は、後（一一頁）に示すとおり出典をもつ。「命」それ自体を使用したものでもなければ、「景命」というその構成も、Ⅱ群で多用する「命」とはあきらかに違う。かくて、ⅠⅡⅢ群がそれぞれ「命」もしくは「勅」を専用ないし優勢に使用する、その傾向は、おのおの群を貫く特徴とみなしうると同時に、また、それゆえに、そこから各群の表現の成りたちを探ることも可能となるであらう。

三、Ⅱ群を特徴づける「命」の使用

ところで、万葉集の山上憶良の「好去好来歌」のなかに、次のような注記をとまなう箇所がある。

勅旨 反云二 いたなきもち 唐能 もろこしの 遠境 とほきまかひに 都加播佐礼 つかはされ (894)

右の「反云」という注記は、同じ歌のなにもう一例ある。それには「船舳 反云二 布奈能閑尔」とあり、本文の一句全体のよみを仮名であらわす。したがって、それと同じ形式の注記「反云二大命」も、「勅旨」について、その意味では

なく、むしろ対応する日本語でのよみを示していることは疑いを容れない。もともと「大命」は、そのよみ「おほみこと」と意味的にも対応する関係にあり、その点では正訓字でもあった。よみを示すうえで、「大命」を用いるということは、それがただちによみを喚起しうる程に、その日本語と表記との関係が安定的であったことを物語る。日本語をあらわす「大命」に対して、その、ほかならぬ注記を付している——言い換えれば、付さなければならなかった——という事実にも明らかたとおり、「勅旨」は、まぎれもない漢語である。字面の限りでは対応する日本語も定かでない漢語の、そのよみを、注記は一律に定めるためのものであるが、そうした漢語は、古事記でも、いわゆる正格の漢文をむねとする上表文（序文）中に「勅語」が二例あるほかには、漢字を、その和訓にもついで使用することを原則とするという指摘のある本文においては、それらしきものとして、わずかに「大日下王者、不受_レ勅命_二（下22ウ）の一例しかない。しかも、それは、

爾大日下王、四拜白之「若疑_レ有_二如此大命_一。故不_レ出外以置也。是恐、随_二大命奉進_一。」（下22オ）^⑤

右の大日下王の言葉のあとの、王に対する根臣の讒言のうちにあって、前出する二例の「大命」にかえて使ったものである。「大命」の三重出を回避することさらな意図が、そこに働いていたに相違ない。かくして、古事記本文では、「勅」の使用をあきらかに控えている。和訓にもつく漢字使用を原則とする本文のその原則に「勅」がなじまなかったというのが、恐らくその理由であつたろう。観点をかえれば、「勅」についての、それを漢語とする認識が使用を控えさせたともみることできる。憶良の歌の表記にあらわれたと同じ、それがむしろ一般的な認識であつたはずである。

「みこと」の正訓字は、もちろん「命」である。憶良歌の注記に「大命」を使用するとおり、万葉集ではそれが最も多く、ほかに「御言」「御命」もあるが、「勅」の例は、憶良歌の「勅旨」を措いてほかにない。古事記でも

上述の「勅命」を除けば、「命」の専用である。そうして、古事記においては、その「命」を一定の形式において使う傾向が著しい。単独の用例の、たとえば「命以」が十二例、ついで「随_レ命」が五例などのほか、他の語と複合した用例も、「天皇之命」が九例、またあるいは「大命」の四例などがある。このうち、「大命」は上述のとおり、また「天皇之命」にしても、万葉集に、仮名・正訓字のいずれの表記とも数多い「おほきみのみことかしこみ」の、たとえば「大皇之命恐」(44)「天皇之命恐」(424)などの表記と彼此照応する。

Ⅱ群で専用ないし優勢に使用する「命」のうちには、そうした古事記や万葉集などの用例とあい通う例が少なくない。まず、古事記で類型的なあらわれをみせる「天皇之命」の類例として、Ⅱ群には、「天皇之命」(五・七・一三・二二・二九)・「天皇命」(七・一三(3)・二三)などがあるほか、「皇后之命」(これは神功皇后)・「先帝之命」(一一)・「天皇之遺命」(二三(2))などもある。もちろん「命」の使用それ自体でも、古事記や万葉集に共通する。たとえば、万葉集の防人歌に、

可_{かし}之古伎夜_{こぎや} 美許_{みこと}等加我布理_{かがふり} 阿須由利也_{あすゆりや} 加曳_{かえ}我牟多祢牟_{がむたねむ} 伊牟奈之尔志弓_{いむなしにして} (4321)

右のように「みことかがふり」とあるが、赤猪子の悲話を伝える古事記の一節に「其年其月、被_レ天皇之命」、仰_ニ待大命_一、至于今日、經八十歳。」(下28才)とあるなかの「被_レ天皇之命」と、Ⅱ群だけであって、それと共通する次の、

被_レ命_一 (五168 169・一二325)

被_ニ天皇之命_一 (七215)

被_ニ天皇命_一 (一三343)

被_レ勅_一 (六191)

一連の用例と、ともに「みことかがふり」に通う漢字表記であつたに相違ない。さらにまた、「命」そのものについて、の認識といつた点でも一致をみる。すなわち、古訓でも「かしこき」「かしこまる」「かしこみて」「かしこみ」などと訓む次の「威」「懼」「畏」などは、これまたⅡ群だけにあり、それらと「命」とのかかわりは、

今不勝^{カシコキ}皇命之威^{カシコキ}、(七199)

豈非^{カシコマル}懼^{カシコマル}天皇之命^{カシコマル}。(一三343)

奉^{カシコマル}命驚^{カシコマル}懼^{カシコマル}之。(二二163)

今畏^{カシコマル}命而發^{カシコマル}軍、(二八314)

万葉集に類型的な「おほきみのみことかしこみ」と、その発想において一連のものであろう。なお古事記の用例に親近をもつⅡ群の用例のうち、とりわけ注目されるのが「命以」である。その語法上の特質については、すでに旧稿^⑧で言及したが、古事記に十二例というように類型をなし、しかも日本語の表現にもとづくと考えられるその語法はもとより、さらに文の構成面でも共通する用例が、次のようにⅡ群に集中してあらわれる。

〔天照大御神、高木神之命以問使^ミ之。〕(上44オ)

〔百濟王命以遣^ミ於吳國^ミ。〕(二二152)

〔故爾、天神御子之命以、饗賜^ミ八十建^ミ。〕(中6ウ)

〔皇后命以、王卿等五十五人賜^ミ朝服各一具^ミ。〕(二九381)

〔天照大神、高木神、二柱神之命以、召^ミ建御雷神^ミ。〕(中3オ)

〔天皇命以、召^ミ之。〕(一三343)

〔天皇命以、喚^ミ之。〕(二三174)

かくして、Ⅱ群の用例は、古事記や万葉集の用例と一致しないし類似する傾向が著しい。^⑨そこに予想されるとおり、類例は他にも少なくない。それらを含め、いずれも、「みこと」の正訓字として「命」が定着していた、恐らくその慣用によったものであろう。古事記や万葉集との用例の一致や類似は、もとより偶然ではなかったはずである。ところで、Ⅱ群で多用する「命」の、その熟合用字として特徴的な用例に「皇命」がある。巻五(1)以下、七(3)、九(1)、一一(1)、二二(1)など、Ⅱ群に限ってあらわれるそれらは、同様にⅡ群専用の「天皇命」あるいは「天皇之命」(巻五(1)以下、七(2)、一三(4)、二二(1)、二三(1)、二八(1))と同じ表現の基調によることは疑いない。その「皇命」を、古訓では、多く「おほむこと」と訓む。けれども、万葉集の用例などをみるに、たとえば、集中「おほきみ」をあらわす正訓字として「皇」^{おほきみのみことかしこみ}「王」を使う場合があり——その後者の「王」にだけ「王命」恐」という例が六例ほどあるにもかかわらず、「皇命」の用例が皆無であるとはいえ——、たぶん^{おほきみ}に類型的な表現の「おほきみはかみにしませば」などの表記においては、その双方をへだてなく使っていることにかんがみ、「皇命」を、「王命」と同じ「おほきみのみこと」の正訓字表記とみることが可能であろう。加えて、「被皇命」(五169)と「被命」(五168)との類縁にまつまでもなく、その「皇命」が「命」に「皇」を付加した構成になることは明らかにあり、また一方、前述のとおり、「被命」が万葉集の「かしこきや みことかがふり」(432)と同じ表現の漢字表記とみなしうる以上、この点を勘案しても、「皇命」を、「おほきみのみこと」をあらわすその漢字表記であったとみて大過ないのではないか。

とはいえ、それは断言するまでもない。古訓の「おほむこと」であれ、右に推定した「おほきみのみこと」であれ、いずれにせよ、「皇命」が日本語にもつくその漢字表記であるという限り、もはや疑う余地はない。「皇命」が、もともと「天皇命」ないし「天皇之命」を縮約した表現であり、それらとあらわれを等しくするということも、

それを裏づける傍証となるであろう。

なお「命」の熟合用字の用例について付言すれば、あとわずかに三例しかないその「宝命」(二二150)「遺命」(二三172 174)「勅命」(二九367)のいずれも、「命」に上接するのは漢語である。したがって、熟合用字の全体として、漢語的性格が強い。まず「宝命」は、唐の国書を伝える、いわばそれにふさわしい四字句を基調とした漢文的潤色の著しい文のなかにある。もとの国書そのままを転載したものか、あるいは書紀が改めて修辭したものか、いずれであるにしても、国書としての体裁をとのえようとした意図によることは疑いを容れない。その性格上、まさに異例とみるよりほかない。次の「遺命」は、二例とも「天皇遺命」とあり、いずれも推古天皇の遺言をあらわす。古訓では「遺」を「のち」と訓むが、もとより「のち」それ自体に、「遺」の意味があるはずはない。逆に言えば、遺言にあたる日本語がなかったために、「遺」を使用せざるを得なかったのであろう。一方、また「命」についていえば、いずれの「遺命」も、「遺言」あるいは「遺詔」の直後にあって、それらの言い換えである。漢書や後漢書などの帝紀では、「遺詔」をもっぱら使い、Ⅲ群でもそれを襲っている(一四389・一五396(2))ことに照して、言い換えて「命」を使うということは、「命」を積極的に使うⅡ群の、その全般的な傾向と無縁ではなかつたに相違ない。そうした点で、くだんの「天皇遺命」は、「遺」それ自体が漢語であるのとはうらはらに、むしろ「天皇命」ないし「天皇之命」との類縁を強く保持していたはずである。

さて残る「勅命」は、一見してその全体が漢語であることを思わせる。しかしながら、「勅命」を含む一文は、詔曰、明神御大八洲倭根子天皇勅命者、諸國司國造郡司及百姓等、諸可聽矣。(二九357)

右のように宣命の冒頭部分と表現の基本において酷似する。宣命の冒頭は型にはまった形式的な表現から成るが、次にあげる元明天皇の即位の宣命も、その一例である。

詔曰、現神八洲御宇倭根子天皇詔旨勅命、親王諸王諸臣百官人等天下公民、衆聞宣。(第三詔・慶雲四年七月)

こうした宣命の表現の形式を、前掲の一文が借りていることは疑いない。「勅命」が、古訓など(岩波大系本も同じ)の訓みのとおり「おほみことのり」をあらわしているか、またあるいは、字面が共通するという点では、右の宣命の「勅命」にあたる「のりたまふ(おほ)みこと」をあらわしているのか、いずれであるにせよ、宣命の表現の形式を借りたことにともなう、いわばその形式に即応させた表現である点にかわりはない。したがって、たとえそれが漢語であるにしても、もちろん漢語そのものの使用を意図したのではない。その使用においては、むしろ日本語をあらわしたところの、すなわちその漢字表記であつたはずである。

「命」の熟合用字の例は右につきる。「皇命」を除いて、いずれも一・二例にとどまる。わずかな数であるから、異例といつてわりきることできるが、しかし異例としたところで、そのうち漢語そのものとみなしうるのは、せいぜい「宝命」ぐらいしかない。そのほかの「遺命」あるいは「勅命」にしても、「命」の限りでは、「みこと」ないしは「みことのり」をあらわすその漢字表記とみて誤りはない。それらもまたⅡ群が多用する「命」の、その類例にほかならない。かくてⅡ群では、天皇の勅命に「命」をもっぱら使い、しかもまた、それを、日本語「みこと」ないしは「みことのり」をあらわす漢字表記として使用することを原則としていたのである。

そうした原則を貫いている以上、漢語的性格の著しい「勅」の使用にためらいがあつたであろうことは、推測にたかくない。実際、Ⅱ群では、「勅」の使用をあきらかに控えている。Ⅱ群をとおして、巻三・六・一三・二三(遺勅の二例)・二九の都合六例にすぎない。しかもそのうち、巻三の例が、

是時、勅以、菟狹津媛賜、妻^ミ之於侍臣天種子命^ミ。(三三)

故爾、天神御子之命以、饗賜^ミ八十建^ミ。(古事記・中6ウ)

皇后命^(こ)以、王卿等五十五人賜^(こ)朝服各一具^(こ) (二九三八)

右のように本来「命」に類型的な表現にかようなはか、卷六の「被^レ勅^ル」(六一四)とある例が上述のとおり「みことかがふり」をあらわしたとみられるこれまた類型的な「被^レ命^ル」(五一六・一二三二)あるいは「被^レ天皇命^ル」(七二五・一三三三)と共通するなど、「勅」をいわば「命」になぞらえて使うといった特徴もある。特徴的なそうした「勅」の使用が、「命」の使用にうかがわれるⅡ群の基調、すなわち日本語(実際には、当該漢字に付随した和訓)にもとづいてそれを漢字表記するという、その基調により、したがってまた「命」の使用と軌を一にすることは、もはや説くまでもないであろう。

四、Ⅲ群を特徴づける「勅」の使用

一方、Ⅰ群・Ⅲ群では、ともに「勅」の多用にこそむしろ特徴がある。用例の数は、もとより「命」の比ではない。しかもまた、それらの使用それ自体にもⅡ群とは明らかな違いがある。

まずⅢ群を取りあげてみるに、そのⅡ群との違いで、まず注目すべきは、「勅」をはじめとして、「命」なども熟合用字として多用する点である。便宜、それら熟合用字の上項に位置する異なり語の限りを拾いだすと、次のとおりである。

〔勅〕

誠勅(一四三八(2)) 天勅(一七一八・一九六八) 帝勅(一七一八) 恩勅(一七二一・二五二五) 宣勅(一七一八・一九六〇) 詔勅(一七二九・一九五七以下(6)) 聖勅(一九六〇) 来勅(一九六四) 前勅(一九七四・二五二二)

〔命〕

景命（一六五） 国命（一七三） 恩命（二五三） 寵命（二六三）

用例の少ない「命」では、わずかに九例しかないその全用例のなかばを、右に掲出した熟合用字の用例が占める。いずれもⅢ群に限ってあらわれるが、そうした熟合用字をはじめとして、Ⅲ群では、「勅」や「命」を、その本来の漢語として使用する著しい傾向をみせる。たとえば、次の出典をもつ例についてはいうまでもないが、

伏願、陛下仰答靈祇、弘宣景命（一六五）

伏願、陛下仰答靈祇、弘宣景命（芸文類聚・卷一四・帝王部・齊明帝）

その傾向は、とりわけ「勅」において、それを対象とする動詞との相関に著しい。そのなかでも用例の多い「宣勅」「奉勅」などを取りあげてみるに、まず「宣勅」については、文選に、

伏見詔書并鄭義泰宣勅、當賜修理臣亡高祖晉故驃騎將軍建興忠貞公壺墳塋。（卷三九・為下彬謝脩下

忠貞墓啓）

右のように「詔書」と并記されている。「鄭義泰宣勅」という場合の、その鄭義泰（梁の官吏であろうと推測する——全釈漢文大系『文選』五の注）がかかるのは、もちろん「宣」である。文中に「陛下」という梁帝の「勅」を彼が「宣」したものの、それがつまり「宣勅」である。同じ文選の「及高后稱制、乃以張鄉爲大調者」。出入臥内、受宣詔命」。（卷五〇・宦者伝論）などでも、「詔命」を「受宣」するのは、「大調者」となった張郷その人である。史書では、たとえば「今吏皆失其中。奉詔宣化如此、豈不謬哉。」（漢書・卷八・宣帝紀）をはじめとして、「宣」は、しばしば「風化」「德化」「威風」「主恩」「聲教」「恩澤」（漢書・後漢書のおもに「紀」の用例）などをその対象とするが、それらが「詔」の内容をあらわすさまざまな言い換えであることは、（高皇帝七年、制「詔御史」「裁判についての具体的な指示をその内容とする」）「上恩如此、吏猶不能奉宣」。

(漢書・卷二三・刑法志)

「制詔」したその内容に対して、「上恩如此」という右の例によっても明らかであろう。いわば、それらは、臣下が「詔」をうけ、それを「化」や「恩」として「宣布」あるいは「宣揚」することをあらわすという点で、まさに一つに括りうる。さきに挙例した「文選」の「宣勅」も、もちろんその例にもれない。

さて、日本書紀では、「宣_レ勅」の用例はⅢ群(一七(4)・一九(2)・二〇(1)・二七(1))にしかない。いずれも臣下をその主語とするところの、つまりは漢語そのものの応用とみなしうる。そしてまた、「勅使奉_レ勅、宣於大河内直味張_二曰_一(一八39)」「大伴大連奉_レ勅宣_二曰_一(一八40)」「持_三詔書_二宣_二曰_一(一九59)」「彌麻沙等、還_レ自_三日本_一、以_三詔書_二宣_二曰_一(一九61)」「大政官等、奉_レ勅奉_レ宣_二(二〇40)」「汝道那等、奉_三斯所_二勅_一、奉_レ宣_二汝王_一」(三〇40)なども、「宣_レ勅」の類例にはかならない。こうしたⅢ群に限ってあらわれる用例も、ひっきよう、漢語をそのまま取りこんだ表現を基調とするⅢ群の、その志向によってもたらされたものであったに相違ない。ちなみに、「宣」はⅡ群の巻一三以前には皆無である。また一方、古事記にも、力士に対する天皇の発話語(中30オ)として、わずかに一例あるにすぎない。

次に「奉_レ勅」であるが、これが「宣_レ勅」同様、漢語の応用であることは説くまでもない。用例は、いずれもⅢ群(一四(3)・一八(3)・一九(7)・二六(2)・三〇(5))に限ってあらわれる。そして、その「奉_レ勅」と同じようにⅢ群に偏在し、それと意味のうえでも類縁をもつのが、「聽_レ勅」「聞_レ勅」「受_レ勅」「承_レ勅」などの、いわば勅を「うける」ことをあらわす一連の用例である。

「奉_レ勅」を含め、それらは互いに通用されている。たとえば、次の一節で「二國」とは新羅と百済とをさすが、その二国の王が天皇の「勅」を「うける」という場合に、

何故、二國之王、不_レ躬_レ來_レ集_レ受_二天皇_一勅_一、輕遣_レ使乎。今縱汝王、自來_レ聞_レ勅_一、吾不_レ肯_レ勅_一、必追逐退。(一七二八)

右のように「受」と「聞」とを使う。「受」に対する「聞」は、「躬來集」を「自來」に、また「天皇勅」を「勅」にそれぞれ縮約し、全体として四字のまとまり二つからなる八字一句を、四字一句のまとまりに改めるなかでの言い換えに過ぎない。単なる言い換えであり、「受」と「聞」とに違いがあるわけではない。右掲の一節に続いて、それと関連する事態を記述したなかにも、さらに「率_二衆三千_一、來_レ請_レ聽_レ勅_一」「頻_レ請_レ聞_レ勅_一」「惱_レ聽_レ勅_一使_二(いずれも一七二九) などとある。あるいはまた、次の例では、「聽_レ勅_一」と「奉_レ勅_一」を使う。「勅」は、いずれも任那の建国をうながす天皇の勅命である。

今日本府臣及任那執事、宜_二來_レ聽_レ勅_一、同議_二任那_一。(中略)詔曰「早建_二任那_一。」又津守連、奉_レ勅_一、問_レ成_二任那_一。(一九六八)

右のほかに、とはいえ関連をもつ一連の事態が展開するなかにも「俱承_二恩詔_一」(一九六九)「乞_レ聽_二恩詔_一」(同七〇)とあり、それら「受」「聞」「聽」「奉」「承」などは、「勅」を「うける」という場合の互換可能な表現として一つに括りうる。それは、つまり「受」以下の一連の語を漢語として応用していたことを物語るであろう。漢語では、それらは、

奉、承也(説文)

聽、猶_レ受也(春秋左氏伝・成公十二年「鄭伯如_レ晉聽_レ成」の杜預注)

右のように互いに対応的な関係にある。Ⅲ群で積極的に行なう「受」以下の語の通用が、そうした漢語本来の用法にもとづくその応用であったことは、かくて疑いない。

ところでⅡ群では、「命」の多用と、またそれを「うける」場合の表現に「被」を——「勅」(六四)や「詔」(一〇三)にも——用いることなどに特徴がある。「命」が「みこと」の正訓字であり、「被」も「かがふる」の正訓字とみられるという点では、その特徴は上述のとおり、日本語にもづく表現を行っていたということにつきるが、しかし、その一方で、「勅」も使い、また「命」に限っては、それを「うける」場合の表現に、当然のことながら「受」を使い、その他、少数ながら「承」(七二・二二五)や「奉」(一三三・二二六)なども使う。そのうえ、次の「聽」の用例もある。

詔曰、明神御^三大八洲^三日本根子天皇勅命者、諸國司郡司及百姓等、諸可^レ聽矣。(二九三)

しかしながら、こうした用例をただちにⅢ群のそれと同一視することは早計に過ぎる。右の例についていえば、さきに「勅命」を取りあげたさいに、一文全体が宣命に類型的な表現とほとんど一致することに言及したが、「聽」もまた、その一致する例にもれない。

現御神止大八嶋国所知天皇^{皇麻止}大命^{皇麻止}集侍皇子等王等百官人等天下公民諸聞食止詔。(第一詔)

ここではどの宣命も、例外なく「聞」ないし「聽」を使う。一方、同じ宣命のなかでも、

現御神止大八嶋国所知倭根子天皇命授賜比負賜布貴支高支広支厚支大命^{皇麻止}受賜利。(同右)

右のように「大命」を「受賜」って、その後に「恐坐^皇此乃食国天下^皇調賜比平賜比天下乃公民^皇惠賜比撫賜^皇」と続く場合などでは、これまた例外なく「受賜」^{うけたまはる}「受給」^{うけたまはる}「受被賜」^{うけたまはる}ないし「賜」^{たまはる}を使う。

つまり、現に「詔」(宣)る「大命」を「集侍」ということに明らかなように、その場で「きく」(聞・聽)場合と、「食国天下^皇調賜」以下の行為の前提となる「大命」を「うける」(受・賜)場合とを、それぞれ一貫して使い分けているのである。日本語の「きく」と「うける」との違いに応じたその使い分けを、古事記でもまた、同

様に行なっている。

於是、大長谷王、以_レ矛爲杖、臨_二其内_一詔、我所_二相言_一之嬖子者、若有_二此家_一乎。爾、都夫良意美聞_二此詔命_一、自參出、(下24オ)

「みこと」を「うける」場合の表現として、もっぱら「受」ないし「被」を使うなかにあって、右を、その類例とみることはできない。「詔命」が女性の存否を問うというのであるから、その内容と、また問いかけに対する対応という点とにかんがみても、宣命の冒頭と同じその場で「きく」という表現がふさわしい。古事記が「命」に対して「聞」を用いるのはわずかに右の一例にすぎないが、それは、つまり「うける」とはその内容を異にする「きく」をあらわす正訓字表記なのである。

日本語であれば、「きく」と「うける」との違いは著しい。宣命や古事記などが、その違いに応じて使い分けているのは、ひっきよう、それらが日本語にもとづく表現と、したがってその正訓字表記とを基調としているからにはかならない。翻ってⅡ群をみるに、「勅命」に対して「可_レ聽」という、まさに「きく」に相当する上掲の(宣命の表現を借りた)例を除いて、「命」はもとより「勅」に対しても、「聞」あるいは「聽」を使った用例がない。すなわち、「みこと」を「うける」場合の表現に「聞」も「聽」も一切使っていない。日本語における「きく」と「うける」との違いに応じて、そのそれぞれを正訓字を使ってあらわす、そのおのずからの結果とみることができると、これを要するに、宣命や古事記と同様に、このⅡ群でも日本語にもとづく表現と正訓字表記とを行なっていたこと、そしてそれが、上述の「命」の多用や「被」の使用、さらには「命以」の利用などをとおしてもうかがわれるとおり、Ⅱ群をつらぬく基調でもあった。

五、Ⅰ群とⅢ群との類縁

さて残るⅠ群であるが、表にあらわしたとおり、「勅」の多用にこの群の特徴がある。「命」も、卷二には二例ある。けれどもそれらは、あい前後してあらわれ、しかも前出例は、

於是、大己貴神報曰、天神勅教、慇懃如此。敢不從命乎。(二73)

右のように、これにさきだつて「勅教」を具体的にあらわしたなかに「汝則可_レ以治_二神事_一」という、まさに「命」がそれにあたる内容をあらわしているし、後出の例でも、

故、經津主神、以_二岐神_一、爲_二鄉導_一、周流削平。有_レ逆_レ命者、即加_二斬戮_一、歸順者、仍加_二褒美_一。(同前)

服従を促す命令の意であるから、「命」がそれにふさわしい。Ⅰ群では、かくて「命」を限定的な意味で、いわばその然るべき内容をあらわすところに限つて使う。あきらかに限定して使うその使い方は、Ⅱ群のそれではない。むしろⅢ群に近い。

一方、「勅」においては、Ⅲ群との類似が著しい。用例が多いということの共通のあらわれは表に明らかであるうが、具体的なその用例で、Ⅰ群に「嚴勅」(一25)とある例が、Ⅲ群に散見する「天勅」「恩勅」「聖勅」などに通うほか、

大己貴神_一而致_二高皇產靈勅於事代主神_一。(二63)

物部大連、方欲_二發_二向難波館_一、宣_二勅於百濟客_一。(一718)

右のような表現の類似した例もある。また一方、さきに掲出したⅠ群の「天神勅教、慇懃如此」とあるうちの「勅」は、体言ではないので表にあらわしていないが、それを含む一文は、Ⅲ群での「誠勅慇懃」(一四389(2))と内

容のうえで彼此照応する。このほか、しいてあげれば「受_レ勅」(一32・二66)「隨_レ勅」(一41・二7578)なども、Ⅱ群には「隨_二天皇勅_一」(二九34)とあるのが唯一の例で、次のとおり、むしろⅢ群にその例が多い。

受_二天皇勅_一(一七28) 受_二天勅_一(一九80) 受_レ勅(二七283)

隨_二天皇勅_一(一九76) 隨_レ勅(二五218) 隨_二前勅_一(二五229)

こうしてⅠ群が多用する用例のほとんどがⅢ群の用例に共通するほか、それらの多用そのことにおいても、Ⅲ群との一致をみる。Ⅰ群の用例のなかに、Ⅲ群を特徴づけ、その数も多い「奉勅」あるいは「宣勅」を見出しえない点に不審が残るものの、それは恐らく、Ⅰ群が神話をその内容としていたことによるであろう。「勅」の使用それ自体においては、ほとんど違いがない。「勅」を漢語として使うという、そのⅢ群の特質を、かくてⅠ群にも認めることができる。という以上に、より広く漢語にもとづく表現を、Ⅰ群とⅢ群とがともに基調としていたとみるべきであろう。「勅」はまさにその基調の具体的なあらわれの一斑にすぎない。Ⅰ群にあって、さきに取りあげなかった唯一の用例「今天神有_二此借問之勅_一」(二63)も、漢語をもとにした表現の一例にはかならない。そうした表現の基調において、Ⅰ群は右のようにⅢ群と共通し、その一方でⅡ群との違いをきわだたせるのである。

六、Ⅱ群における「御」の使用と「御所」

さて、最後に「御」を取りあげる。敬語としてのその用例は、日本語では接頭語の「み」がそれにあたる。漢語であればもちろんその限りではないが、いずれにしても、以下に取りあげようとするのは、事や物あるいは人(神)などをあらわす語に上接して、それらに対して敬意をあらわす「御」である。

該当する用例は多い。しかしそれらも、「勅」「命」同様、群ごとにあらわれを異にし、またその検討をとおして

さぐり得たと同じ各群それぞれに相異なる特徴をみせる。たとえばⅡ群の用例に、

諸縣君泉媛、依獻^レ大御食^ニ而其族會之。(七²⁰⁷)

右のようにある「大御食」は、古事記に「將獻^レ大御食^ニ之時」(中33オほか)といい、また万葉集に「大御食^ニ尔仕奉等」(38)という「おほみけ」をあらわすその漢字表記である。一方、Ⅲ群には、次のような記述がある。

顛^ニ仆於庭^一、覆^ニ所擎饌^一。饌者御膳^ニ之物也。(一四³⁸¹)

「饌」はふつうにはそなえ物の意をあらわすが、この場合では、とくに天皇の召しあがり物の意をあらわしていることを、注の「御膳之物」はさし示している。天皇の召しあがり物といえば、日本語では、まさに「おほみけ」がそれにあたる。一方、「饌」も「御膳」も、ともに漢語である。こうして同じ内容のものでも、Ⅱ群がそれを日本語を使って漢字表記するのに対して、Ⅲ群では、どこまでも漢語を使ってあらわすといった違い、さきの結論そのままに、それぞれが基調とする表現の違いを、この「御」をとおしても指摘できる。

はじめにⅡ群の用例をみるに、「大御食」と同じように、「御」を接頭語「み」の漢字表記として使った例が少なくない。そのなかには、「御孫尊(命)」(六¹⁸⁵(2)・九²⁴⁹(4)・二八³²⁴)や、「山河之水泳御魂」(五¹⁷⁰)「皇祖御魂」(二九³⁵⁸)あるいは神名の一部となっている「名、撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命焉」(九²⁴²)という「御魂」など、いくつかの巻に散見する例もある。そうした用例のうちでも、とりわけ注目されるのが「御所」である。用例は、次のようにⅡ群の巻々にだけ、しかも偏りなくあらわれる。

(一)欲^レ龍清彦^ニ而召之、賜^ニ酒於御所^一。(六¹⁸⁵)

(二)其栗林之菓、不^レ進^ニ御所^一也。(九²⁵⁴)

(三)若有_レ向_二天皇之御所_一、具奏_二兄王聖之且有_レ讓矣_一。(一一二 294)

(四)皇子則將_二來其氷_一、獻_二于御所_一。天皇歎之。(一一三 314)

(五)遠居御所、行_レ政不_レ便。(二一八 315)

(六)遣_二高麗大使(人名略)小使(人名略)等、奏_二使旨於御所_一。^⑧(二一九 364)

つごう六例あるが、いま、かりに「御所」とそれを対象とする動詞との相関をもとに分類してみると、(一)(三)(五)は、場所的な意味あいが特に強い。一方(二)では、それを「天皇」に置きかえることもできる。また(四)では、助辞「于」「於」があるから一見して場所の意をあらわしているかにみえるが、たとえば「是道路間、獲_二白鹿_一。乃還之獻_二于天皇_一」(一一三 312)あるいは「因遣_二吉備武彦_一、奏_二之於天皇_一曰」(七二 219)など、「御所」にかえて「天皇」をあてはめることも可能であり、(二)の類例とみなすことができる。それら(二)(四)を一括すると、さきの(一)(三)(五)などの一類とあわせて、大きく二つの類に分けられる。

もとより「御所」それ自体に意味の違いがあるわけではなく、ただ動詞との相関をもとに便宜的に分類してみたまでであるが、そうして分類してみると、古事記にある「御所」の用例にも認められる二つの類と、類としての、したがって用例相互の一致をみる。

。(一)(三)(五)の類

(1)乃、違_二遣於木國之大屋毘古神之御所_一。(上 28 オ)

(2)故、隨_二詔命_一而參_二到須佐之男命之御所_一者、(上 28 オ)

(3)爾、其矢_レ速_レ坐_二天安河之河原_一、天照大御神、高木神之御所_上。(上 41 オ)

。(二)(四)の類

(4) 猶宜_二白_一天神之御所_二。 (上3ウ)

(5) 請_二白_一天皇之大御所_二而、 (中60オ)

(6) 爾、侍_二其大長谷王之御所_一人等白、 (下25オ)

古事記の用例についてはすでに指摘があり、岩波日本思想大系『古事記』の「訓読補注」(49頁)には——「御所」が四例、「大御所」が一例あるというが、右のとおり「御所」は五例ある——、二例(右に掲出したうちの(4)(5))は「天神」や「天皇」そのものを指す尊称で、場所の意味はなく、他の三例(同じく(2)(3)(6))は場所を示し、なおかつ「尊称であつて正格漢文には表記されない用法である。」と説く。そして訓点資料の用例をもとに、「みもと」と訓む。

用例を二つの類に分けるのは、小稿と立場を同じくするが、しかし二つに分類したそのそれぞれについての説明は、どうにも釈然としない。たとえば(4)(5)を尊称とみて、場所の意味はないとするが、はたして尊称の限りでそれを使ったものなのか。尊称としたところで、「天神」や「天皇」に尊称を使う例がほかにあるのか、またそもそもそれらに尊称を使う必要があつたのか。さらにまた(2)(3)(6)について、場所を示しながらなお尊称であるということ自体が不可解でもある。

右に先学の所説を取りあげたのは、もとより、疑問を提示するためではない。そこに、一部の用例について「正格漢文には表記されない用法」という指摘があるからにはかならない。小稿の立場から言いかえるならば、それは、つまり古事記での用例のうちに漢語「御所」の通常とは違う用法による例があるということである。それらを含め、古事記での用例を一律に「みもと」と訓むが、小稿では、その訓みと「御所」との関係に関心をよせる。すなわち「御所」を漢語そのものとして使つたのでなければ、それが日本語「みもと」をあらわす漢字表記であつたことも

考えうるからである。

古事記の用例のうちに「大御所」とある例は、「御所」の性格を探るうえで極めて示唆深い。というのは、古事記では、「大御」は「おほみ」をあらわすことが通例であり、その通例にかんがみて、「大御所」はその構成上「おほみ」をあらわす「大御」と「所」との結合に成ること、それゆえに、またそれが日本語をあらわしていることも確実に推定できるからである。「もと」をあらわしたとみなしうる「所」の例は管見にはいらないけれども、「所」は、接尾語「がり」の表記としては、「もと」の正訓字「許」と通用されている。

〔許〕妹許と吾が去く道の(154) 妹等許今木の嶺に(1795)

〔所〕妹所と云はば七日越え来む(2435) 妹等所我が通く路の(1121)

右のような「許」と「所」との通用は、その両者のあらわす意味が等しいとみる認識によるであろう。「がり」と「もと」とは、これまた意味的な重なりを持つ。そうして「所」を「がり」の正訓字として使う以上、意味的にも重なる「もと」をあらわす正訓字としても、その「所」の使用は当然ありえたはずである。

ところで、古事記の用例は、いずれも一定の表現の型から成り立っている。すなわち「天皇(神)」「王(命)」之(大)御所」とあるそのどれもが「――之御所」という型から成る。しかもまた、その「御所」が行為の及ぶ対象であるという点も共通する。類型的なその表現の型は、宣命の「掛畏我皇聖太上天皇御所尔奏給波」(第二十五詔)とある用例のほか、さらには、正倉院文書の「人々啓狀」(引用は寧楽遺文下巻による。頁数も同じ)のなかに使われている「御所」にも、同様にみることができる。「人々啓狀」での用例は、

誠惶誠惶謹啓 尊者御所右邊

右、山背國在林郷阿刀老女等、昔在古郷、今坐三報里、朝歎々家内食、暮望仁大徳、然仰望者、彼此遠隔、相

見遙絶、仍捧翼狀、謹馳深思

天平寶字二年九月一日

(950頁)

右例のように、消息文に先立つ書き出しの部分や、また次の、

適始面奉、更不寒溫、緣見將大般若卅卷及道巖經十三卷、今沙彌奉送、請被檢領之、不具、

(天平寶字二年)

九月廿三日唐僧惠雲狀

佐官御所

經坊司

(951頁)

消息文の後の宛先を記した箇所などにあるほか、消息文それ自体のなかにも「佐官尊御所申給」(951頁)とある。いずれにしても、消息文の受け手に対する「尊」「尊者」などの尊称あるいは官名などにつけて、受け手自身を行為の直接的な対象とするのではなく——つまり敬避して——受け手の近辺、そのもとを対象とする、それが「御所」のふつうの用法である。正倉院文書のなかの「人々啓狀」として一括されている仮名文書には、

布多止己呂乃己乃己呂美乃美毛止乃加多知支々多末ツ尔多天万都利阿久(甲文書・959)

右のように「美毛止」の仮名書き例がある。時代別国語大辞典(「みもと」の項)では、その「みもと」の直前の「乃」の右下に付された「レ」をもとに、「乃」をはさんで重出する二つの「美」の一方を衍字とみて、「みもと」を認定しているのであるが、挙例した右の一節の、受け手の消息を尋ねるというその内容や、また「みもとのかたち」という言い方などに照らして、受け手自身を「みもと」と称していることは疑いない。さきに掲出した「御所」が、いずれにせよ行為の対象であり、その行為の及ぶ場所的な意味あいを含みもっていたのとは、いくぶん違

うものの、もちろんその派生的な意味を出るものではない。そしてそれらのあらわす意味は、漢語「御所」があらわす通常の、すなわち「天子の御座所」といった意味とは明らかに違う。仮名書き例から類推して、「人々啓狀」として一括される文書中の「御所」は、かくて「みもと」をあらわす漢字表記とみて誤りないであろう。

古事記や宣命などの用例が、正倉院文書中の「御所」と、語法やそれが使われる一文の構成にいたるまで一致することは上述のとおりである。古事記では、その用例が二つの類に分けられるが、もとより別語であったはずはない。「御所」を使う文中の、その動詞との相関の異なりによって、意味に若干の違いが生じるまでであって、そうした違いが生じるということそのことも、また、「御所」を漢語そのままでなく、むしろ日本語「みもと」の漢字表記として使ったことを推測させる徴証となるであろう。Ⅱ群の「御所」は、これまた上述のとおり、古事記の用例との類縁が著しい。その類縁と、さらには前掲「大御食」「御孫」「御魂」などの用例——類例はもちろん少なくとも——が示唆するⅡ群の一般的な傾向、すなわち「御」を接頭語「み」の漢字表記として使う点に特徴があるその傾向とから判断して、Ⅱ群の「御所」もまた、「みもと」の漢字表記であったことは疑いを容れない。もとより、その使用が、Ⅰ群を貫く表現・表記の基調と無縁であるはずもない。かくして、「命」の使用に顕著であったⅠ群の、日本語にもとづいてそれを漢字表記するという基調を、この「御所」をとおして追認しうるのである。

七、Ⅲ群における「御」の使用と「御座（坐）」

さて、Ⅱ群の用例を「御所」に代表させたと同様に、以下にⅢ群の用例を検討するうえで、便宜、その代表的な用例を取りあげてみる。もっとも、用例の総数自体が少ない関係上、格恰の例といえるものは無いが、それでも、「御座」は、Ⅲ群の用例を代表しているとみなしうる。三例あるそのいずれも、別々の巻にある。「御所」に類縁

をもつ語でありながら、それとは互いに排他的にあらわれる点も、また注目にあたいる。

まずは次の例。出典をもつ一節のなかにある。

乃聽而不_レ即_二御座_一。世嘉_二其能以_レ實讓_一、（一五46）

出典は芸文類聚・卷二一・人部・讓の「呉志」である。掲出した限りは原文そのまま（ただ「坐」だけは、原文では「座」に作る）であるから、それは引用するまでもないであろうが、この「御坐」は、右の一節に先立つ記述の、同じように芸文類聚の一節を利用したなかにある次の「天皇之坐」にはかならない。

百官大會。皇太子億計、取_二天皇之靈_一、置_二天皇之坐_一。再拜從_二諸臣之位_一曰、此天皇之位、有_レ功者、可_二以處_レ之。（一五45）

諸侯大會。湯取_二天子之靈_一、置_二天子之坐_一、再拜從_二諸侯之位_一。湯曰、此天子之位、有_レ道者、可_二以處_レ之。（卷二一・人部・讓「周書」）

それはまた、右にいうように「天皇之位」の象徴でもある。

ほかに二例ある「御座」も、右の例となんら変りない。説明を加えながら挙例してみるに、次の例は、大極殿で倉山田麻呂臣が「三韓表文」を誦唱する際に起った蘇我入鹿殺害事件のその記述中にある。傷を負った入鹿は、「御座」にすぎりつく。

入鹿、轉_二就御座_一、叩頭曰、當_レ居_二嗣位_一天之子也。不_レ知罪。乞垂_二審察_一。天皇大驚、（二四209）

残る一例は、穴戸の国司が献った「白雉」を御覧になるという記述のなかにある。

時左右大臣、就執_二輿_一（雉をいれたこし）前頭、伊勢王（ほか二名）、執_二輿後頭_一、置_二於御座之前_一。天皇、即召_二皇太子_一、共執而觀。（二五249）

「白雉」を休祥とみているので、その観覧は「如_三元會儀」というほどの盛大でおごそかなかで行なわれる。「御座」は、そうした晴れの場にしつらえられた「天皇之坐」である。さきの例も、大極殿で三韓の使節の朝貢を受けるという儀礼的な場にある。はじめに掲出した「御坐」も、これまた「百官大會」という盛儀をとり行なう場にある。Ⅲ群の「御座」は、かくて三例とも、晴れの場でのまさに天皇がそこに即くべき座、すなわち「天皇之坐」をあらわしていたのである。そのうちの一例は、出典そのままの漢語である。他の二例も、同じ漢語であることは言を俟たない。漢語の使用は、さきに取りあげた「御膳」もそうであったように、Ⅲ群に特徴的な表現上の基調であった。ほかに「御」に限っても、そうした漢語の使用例（たとえば「御路」二七九・「御苑」三〇四など）がある。それらも、結局は、同じ基調のあらわれにはかならない。

八、再び、Ⅰ群とⅢ群との類縁

ところでⅠ群には、Ⅱ群、Ⅲ群を特徴づけたそれぞれ「御所」「御食」や「御座」「御膳」などの例がない。けれども親近をもつのは、あきらかにⅢ群である。

たとえば、「御服」と「御衣」とは互いに類義的な関係にあり、いずれの使用もありえたはずであるが、是後、稚日女尊、坐_三于齋服殿_二而織_三神之御服_一也。（一三三）

Ⅰ群では「御服」を使う。一方、同じ内容をあらわした古事記の記述をみるに、次のように「御衣」とある。

天照大御神、坐_三忌服屋_二而令_レ織_三神御衣_一之時、（上19才）

古事記では、用例の全てが「御衣」（ほかに七例）であり、「御服」は一例もない。「御服」を使用するⅠ群と「御衣」を専用する古事記との、その両者のそれぞれの使用は、互いに排他的なのであるが、まさにその排他的な

使用は、書紀においても、Ⅱ群とⅢ群との間にみることが出来る。すなわちⅡ群では、卷二九にしか用例がないが、御衣袴（379）褙御衣三具（381）帛御衣三具（同）御衣御被各一具（384）

右のように、古事記と同様に「御衣」の専用である。それに対して、Ⅲ群では、卷三〇の一例だけであるが、

此以天淳中原瀛真人天皇御服、所縫作也。（三〇395）

「御服」を使う。その「天皇御服」は、Ⅰ群の「神之御服」と一致する。古事記やⅡ群が「御衣」の使用に徹していることにかんがみても、Ⅰ群は、それらとは明らかに違い、むしろ用例の一致するⅢ群に類縁をもつとみて誤りないはずである。ちなみに、万葉集でも、「みけし」には「御衣」（2065）を使い、「御服」の例はない。

そのほか、Ⅰ群には、特徴的な用例として「皇孫」が四十例近くあるが、Ⅱ群では、卷三にそれが一例あるほかは、さきにも言及したとおり、「皇御孫尊」（六185・二八324これは「命」に作る）あるいは「御孫尊」（九249（4））など、いずれにも「御」を冠し、「尊」ないし「命」といった尊称をつける。「皇孫」を頻用しながら、Ⅰ群には、そうした例が一切ない。Ⅱ群との違いはかくて著しい。翻ってⅢ群をみるに、ここにもまた、Ⅱ群に散見する例がなく、「皇孫」（二六265（2）267・二七291）があつて、Ⅰ群と共通したあらわれをみることが出来る。^⑩

用例が少ないということに伴う不安はどこまでもつきまとうけれども、少ないということのほか、右のような類縁をもつ例があることなどから、Ⅰ群もⅢ群と同様に、漢語による表現を基調としていたとみて恐らく大過ないであろう。ほかにいくつかある用例でも、Ⅱ群の例に一致するものはない。Ⅱ群とは基調それ自体を異にしていたからにはかならない。さきに「勅」「命」をとおして得た結論は、かくてこの「御」にそのままではまる。

九、次稿への橋わたし

以上、小稿で取りあげた「勅」「命」「御」をⅠⅡⅢ群がそれぞれ使うその使い方は、冒頭に指摘したとおり、前稿で検討した「奉」の、その各群それぞれの使い方とまさしく合致する。結局、同じ使い方を一貫させていたわけでもとよりそれは、個別にとどまるものではないであろう。記述を成りたせるその基調、あるいは表現の基調そのものがⅠ群とⅢ群とではあい通い、それら二つの群とⅡ群とで大きくへだたるということである。漢語そのままの使用と日本語（和訓）にもとづく漢字表記、すなわち正訓字の使用という、各群の記述あるいは表現を成りたせる基調は、この稿につづく第三稿で取りあげる動詞にも、また同様にあらわれるといった見通しが、おのずから立つ。同じような作業の積み重ねでしかないが、それによって、書紀の成立の問題、さらには日本語と漢語との相関、あるいは日本語をもとに、それとは本来異質な漢文で記述・表現することにもなう、たとえば和習などの問題も、広い観点から捉えなおすことも可能となるであろう。前稿とこの稿と、ささやかな試みではあるが、またそれへの布石でもある。

（一九八三・一一・九）

注

- ① 「日本書紀の敬語——『奉』をめぐる——」『仏教大
学研究紀要』第六十八号。
- ② 類例として「詔」があるけれども、卷一・二のいわゆる
神代巻に体言としての用例なく、また一方、その神代
巻を除けば、巻ごとにそれほど顕著なあらわれの違いも
認めがたいので、小稿では取りあげない。
- ③ 「勅」の下に動詞がただちに続く例、たとえば「勅任
三子」（一七）「勅副物部連」（一七二）「勅諭日本府與任
那」（一九六）「勅喚東宮」（二七三）などでは、熟語動
詞とみなしうる可能性、あるいは「勅ヲモ（チ）テ」と
訓みうる可能性なども、無くはない。これらの「勅」は、
それ自体問題となるが、いまは便宜にしたがって、取り
あげる対象からはずす。もちろん大勢には影響ない。
- 一方、「宣發遣郭務儂等勅」は日中臣内臣遣沙門智祥（
二七三）の「勅」については、国史大系本では、動詞
とみて下に続けているが、岩波古典文学大系本のように
「宣發遣郭務儂等勅」ときり、体言とみて取る。
なお挙例した用例の下にカッコでくくった数字のうち、

漢數字は書紀の巻を、また算用数字は国史大系本の頁数を、それぞれあらわす。

- ④ 前稿(注1)の補注(6)でその指摘に言及したが、『文体の事』『古事記伝』一、あるいは亀井孝氏「古事記はよめるか」『古事記大成』(言語文字篇)三など。

- ⑤ 上中下は古事記の巻を、また以下の数字とオウは『古事記大成』本の丁数とその表裏を、それぞれあらわす。

- ⑥ 天皇の勅命ではないので、上掲の表に数字としてあらわしていないけれども、Ⅱ群には、「太子命」(二二三三)「大兄王之命」(二二三三)「東宮之命」(二二三三)「高市皇子之命」(同三三)「皇后命」(二二三三)などもある。

- ⑦ Ⅱ群では、天皇その人を畏む。前稿(注1)の「三、各説(神謙讓)」の項参照。

- ⑧ 『日本書紀』の句法『国語国文』第四十七卷第九号。ほとんど同じ内容でも、Ⅱ群では、動詞として「勅」を使ってあらわす。次のとおり。

- ⑨ 父天皇、圖計便宜、勅賜既畢。(一七三) 天皇以(中略)末多王、幼年聰明、勅喚内裏、親撫頭面。(一四三)

- ⑩ 天皇、疾病彌留。勅喚東宮、引入臥内、(二七三) 本文は、北川和秀編『続日本紀宣命 校本・総索引』による。

- ⑪ この一文は、従来、訓みが定っていない。おもなもので

だけでも、

勅以菟狹津媛、賜妻之於侍臣天種子命。(集解)

・通釈)

勅以菟狹津媛、以下右に同じ。(岩波大系本) 勅以菟狹津媛、以下右に同じ。(国史大系本)

右の三通りがある。注9に示したとおり、Ⅱ群では「勅賜」とあらわすが、それとは、あきらかに違う。漢文の通常の表現としてみれば、「勅以菟狹津媛賜妻之於侍臣天種子命」と訓む余地もあるが、そのこと自体すでに問題なので、いま、本文のように訓んでおく。

- ⑬ 「宣命」については、宣長「まづとりすべていふ事ども」『統紀歷朝詔詞解』一卷や安藤正次『奏宣の文学』『記・紀・万葉集論考』(著作集4)などに詳しい説明がある。「ノル」「ノリキカスル」などの日本語をあらわしたものととして「宣」を捉えている。

- ⑭ 前稿(注1)の「三、各説(承受)」の項で、それらが日本語(和訓)にもとづく漢字表記とみなしうることを指摘した。

- ⑮ Ⅱ群には、「嚴釜」(三三三その他)「嚴咒祖」(三三三)「嚴矛」(二二三三)などのいわば呪的の意味をあらわす一連の用例がある。しかしⅠ群の例は、「但、父母已有嚴勅」とあって、ササノヲの暴虐のあとの「故、其父母二神、勅素戔鳴尊、汝甚無道。(中略)遂逐之。」(一

11) をうけ、その「勅」をあらわしたものである。この「嚴」は、漢語そのものとみるべきであろう。もちろん、呪的な意味はない。

⑮ この部分、原文には「奉_レ使旨於御所」とある。書紀集解などは、そのままにして注記も付さないが、日本書紀通釈では「奏_ニ奉_レ使旨於御所」とし、岩波古典文学大系書紀では「奉」を「奏」に改める。同じⅡ群に属する「新羅遣_ニ奈末伊彌買_一朝貢。仍以_ニ表書_一、奏_ニ使旨_一。」(二二161)や古事記の「猶宜_レ白_ニ天神之御所_一」(上3ウ)などの例に徴して、「奏」が相当とみる。

⑯ この辺り、寧楽遺文では「己乃己呂乃、美美毛止乃加多知」に作るが、書道全集(第九卷)の写真版によって

改める。

⑰ ちなみに、「御」を動詞として使った用例でも、Ⅰ群の、たとえば次の、

又勅曰、以_ニ吾高天原所_一御齋庭之穗_一、亦當_レ御_ニ於吾兒_一。(二75)

古訓で「きこしめす」と訓む「所御」の「御」に類する例がⅡ群にある。

御_ニ新嘗於磐余河上_一。(二112)

天皇御_ニ新嘗_一。是日、皇太子・大臣、各自新嘗。(二四194)

後出例にあきらかなとおり、天皇に限ってそれを使用する、すなわち敬語である点も共通する。

(文学部・助教授)